

日本代表の活躍に向けて

日本オリンピック委員会選手強化本部長

山下泰裕
やました やすひろ



東京オリンピックにおける日本代表選手・チームの活躍は国民的な関心事であり、経済界・企業人も大いに注目している。開催国としての目標「金メダル30個(世界第3位獲得)」に向けた取り組み状況、残された課題などについて、JOC(日本オリンピック委員会)選手強化本部長の山下氏に、展望や抱負について伺った。

友人たちから同情されるほどの重責

強化本部長の責務は、日本代表選手の活躍にとどまらない。山下氏は、競技を通じて選手が自らの可能性に挑戦することに加え、訪日する外国人が快適に日本に滞在できる配慮も不可欠と語る。

「私がJOCの強化本部長に就任するにあたり、国内外の友人たちから言われたことは、『大変な役に就いたな』という同情の言葉でした。自国開催オリンピックを成功に導くという責務は、それぐらいに重いものです。」

外国から日本に来られる方に気持ちよく観戦していただくことはもちろんのこと、自国の選手が活躍し、世界中に注目されるのが求められているのです。来年7月、8月の晴れ舞台で、日本代表選手たちがいきいきと輝き、自分の可能性にチャレンジし、努力の成果を発揮する。また、最後まで胸を張り、笑顔で閉会式を迎えることができるような、そんなオリンピックにすることが、私たちに求められたものだと思います」

やっとの思いで掲げた金メダル30個の目標数字

北京9個、ロンドン7個、リオデジャネイロ12個、これが過去3回のオリンピックに派遣された日本選手団の金メダル獲得数である。メダルの数がすべてではないが、世間の関心がそれに向いてしまうのも事実である。今回、2020年開催の東京オリンピックに向け、JOC選手強化本部は、「金メダル30個」という目標を掲げた。

「金メダル30個はやっとの思いで出した数字です。しかし、これはけっして実現不可能な数字ではないと思っています。近年、さまざまな競技で若い選手が育ってきました。これまでの、柔道、体操、レスリング、マラソンなど、お家芸といわれてきた競技だけではなく、どの競技にも金メダルの可能性があります。」

私が強化本部長に就任した2年前、早速、『2020年の目標金メダル数はいくつですか?』とマスコミに一齐に聞かれましたが、その場の思いつきでいいかげんに答えられるものじゃありません。『せめて1年くらいは時間をください』が私の本音でした。

さまざまな種目の競技団体の現状を冷静に分析し、そのうえで実現可能な数字を出さないとはいけません。オリンピックを盛り上げようという考えもわかりますが、やはり無責任に根拠のない目標を出すのは好ましくありません。そこでその後、約束どおり1年の時間をかけ、徹底的に調査し考え抜いて出した数字が『金メダル30個』です。

マスコミの方もちょっと意地悪で、あれだけ催促した目標数字なのに、今度は本部が高い目標を掲げて選手の尻をたたいているなんて言っています。しかし、プレッシャーだけでなんとかなるような目標ではありません。この目標を実現するには、各競技団体と協力し、選手が集中できる環境をつくっていかねばなりません。

基本は『アスリートファースト』ですが、選手を甘やかすのではなく、またノルマを課すのでもない。大きな成果を出すために、選手を中心に多くの人を巻き込んでいくことが大事なのです。やればできる、そう思えるようなオリンピックになれば最高です。でも、どこの国も必死ですからね、そう簡単にはいきません」

オリンピックに出られる緊張と 幸せを味わってほしい

山下氏は言わずと知れた元オリンピック選手である。1984年のロサンゼルスオリンピック柔道無差別級で、負傷にも負けず、見事金メダルを獲得。このことは多くの日本人の忘れられない記憶となっている。

「オリンピックでは、たしかにそれまでの大会とは比べものにならないほど緊張しました。ただ、私はその緊張がけっして悪いこととは思いませんでした。『これでいい、もっと緊張してもいい、だってこのために俺は努力してきたのだから』。そう思っていました。」

オリンピックは、国を背負って出場する大会です。ですが、私はあまりそういうプレッシャーは感じませんでした。『俺は俺自身の夢に挑戦する、自分の夢を現実にして、俺のやってきたことは正しかったんだ』。そう思えるようにひたすらがんばった。だから今の選手たちにも、まずは自分のためにがんばってほしいと思っています。オリンピックに出られる、こんなに幸せなことはありません。それをしっかりと味わってほしいと思っています。

これは個々人の選手たちにも、選手団全体にもいえることです。が、本番に向けて一番大事なのは、試合当日に選手の能力が最大になるように、トレーニング、体調管理、メンタル管理などを調整していく『ピーキング』です。来年の開催までは、まだしばしの時間があります。目先の結果に一喜一憂しても仕方ありません。最高の状態で最高の結果が出るよう、皆でがんばっていきたいと思います」

スポーツが気軽に楽しめるオリンピック後の社会への布石

オリンピックで結果を出すことに集中している山下氏は、今はオリンピック成功への協力を絶やさないと重要だとしつつも同時に、オリンピック後のいわゆる「レガシー」（遺産）に関しても、しっかりと見据えている。

「これからの時代、スポーツ界がより良い社会づくりに貢献するために、何をなすべきなのか。そういう視点を欠かすことはできません。」

最近、気持ちの折れやすい若者が増えているといいます。ちょっとした失敗で傷ついてしまったり、SNSによるコミュニケーション不全の問題も見られたりします。『相手の目を見て話ができない』『自分の思いを直接会って人に伝えることができない』『相手の立場に立つてものを考えることができない』。健康というと身体のことを指すと思いがちですが、同じぐらい大事なのは心の健康です。そういう心の健康に対して、スポーツが何かできないだろうかと考えています。

そのためにはまず、子どもたちからお年寄りまで、また、健常者も障がいのある人も、皆が身近にスポーツを楽しめる環境をつくっていくことが大きな課題だと思っています。スポーツは若い人のもの、勝ち負けを競うもの、苦しいもの、それだけのものではありません。欧米などではもっと自由にスポーツに親しんでいます。競争にこだわらず、その人なりのやり方で楽しむ。そういうスポーツの新たな可能性をぜひ皆に知ってもらいたいと思います。

北欧のフィナンランドは約30年前に、国際競技大会用の選抜式のレベルアップから、国民総参加のスポーツへと政策を変えました。

北欧は日照時間が少なく精神的な病を患う方も多く、社会問題になっていました。それを克服するために活用したのがスポーツです。

勝ち負けではなく、多くの人が仲間といっしょに気軽にスポーツに参加する、そんな環境づくりを進めたところ、実際に自殺者や精神的な病を持つ方の数も減ったそうです。加えて、ルールを守る、仲間と力を合わせる、相手に対する敬意を持つ。遊びでやっているだけでも、心身は健康になるし、スポーツからは多くのことが学べるのです」

フェアな社会づくりを目指して

山下氏は、神奈川県体育協会で取り組むいじめ根絶運動、また、スポーツを通じた国際貢献活動にも積極的に取り組んできた。今後も、経済界をはじめ、政治、教育機関など、社会全体が一体となったスポーツ振興が欠かせないと強調する。

「私が柔道を通じて学び、最も大事にしているのはフェアプレーの精神です。さらに、こうした精神は日常生活に活かしてこそ初めて価値を持つものだということも教わりました。日本の社会をフェアな社会にする。弱者に対する思いやりの心を育む。しかし、言うは易く行うは難しです。一人ひとりが動かなければ何もできません。オリンピックは結果も大事ですが、そういう理想にもこだわっていききたい。そして、オリンピックが終わってからも、スポーツが社会に根付き、フェアで思いやりのある社会、多少の挫折があっても皆の励ましや思いやりでやり直せる、そんな社会になればいいと思います。そのためにもスポーツ界、経済界でこれからもともに歩んでいききたいと思います」

（取材日：2019年4月12日）